

「ほどよい母親」は虐待を克服するか - 現代日本の病理・児童虐待 -

激増する発生件数

児童虐待が激増しているのは周知の事実である。最近の各新聞の報道をまとめると、次のようなことがわかる。

厚生労働省は、1990年度以来、全国の児童相談所が前年度中に受け付けた児童虐待相談処理件数をまとめて公表している。発表されるのは例年秋であるが、今年はこの問題の重大化・深刻化を受けて、六月に異例の緊急調査が行われた。

この十年間、虐待の件数は増加し続けており、しかも、その増加率は急カーブを描いて上昇している。若干の数値を抜き出してみると、次のようになっている。

1990年度（初回）	1,101件
1998年度	6,932件
1999年度	11,631件（前年度より4,699件増）
2000年度	18,804件（前年度より7,173件増）

十年間のトータルを見ると、虐待の相談件数はおよそ17倍に増えている。しかし、これらとて氷山の一角に過ぎないと指摘されており、それは専門家でなくとも感じるころである。同じく厚生労働省の推計によると、年間約三万件の児童虐待が発生しているとされる。いまとなつては、この三万という数字すらひかえめなものに映る。

今年に入ってから統計調査で、いまのところ明らかにされているのは、警察庁がまとめたもので、それによると、今年一～三月の三ヶ月間に警察が摘発した児童虐待事件は、昨年同期より12件多い51件（30.8%増）となっている。被害児童は14人増えて53人、このうち死者は6人増の16人である。単純に計算して、被虐待児童の致死率は31.4%に達し、3人に1人は親に殺されている実態がある。

このままいくと今後はどうなるのか、増えることはあっても減ることはまず考えられな

い。世界の中で見たとき、精神疾患や薬物依存、売春、レイプなどが介在していない児童虐待がこれほど蔓延し、社会問題化しているのは、日本だけに特異な現象だと考えられる。ということはつまり、現在の児童虐待について考えることは、そのまま現代日本社会と日本人について論じることに他ならない。日本の親は世界一残虐であり、親子関係の崩壊は世界一進んでいる。そういう親はごく一部に限られているという言い方は、いまではもう通用しない。この事態を招き、保持し、さらに悪化させている要因は何か。

日本人と外国人との違い

日本と諸外国との決定的な違いは、権威、特に宗教的な権威の有無である。ブッシュ大統領の就任式の時には、聖書に手を置いて職務を誠実に遂行することを宣誓する姿が、全世界に中継された。就任演説は「あなた方に神の祝福を。アメリカに神の祝福あれ」ということばで終わっているし、大統領は式の後、その足で教会に報告のため向かっている。それから、以前、ペルーの日本大使館占拠事件があった際、犯人グループと当局との仲介役を務めたのはシブリアニ大司教であった。さらに、三年ほど前の米マスコミによる調査では、アメリカ人青少年（13～17歳）の94%が、神の存在を信じている。もちろん、このようなことは、イスラム教にもヒンズー教にも共通している。

日本で同様のことは絶対にあり得ない。国会議事堂に祭壇を設け、首相が施政方針演説のたびに神仏を礼拝したらどうなるか。糾弾どころではすまず、暴動や内紛に発展する危険性が高い。テロリストに対して、僧侶や神官が交渉を申し出ても、無視されるか、事態のさらなる悪化を招くかのどちらかであろう。日本人が「宗教」と聞いて思い浮かべるのは、おそらくオウム真理教や法の華三宝行などであり、神や仏の話題は、日常会話からほぼ消滅している。

戦後、日本人はあらゆる権威を失い、その積極的な否定に努めてきた。その中で育てられ、教育されてきた子どもたちには、当然恐れるものは何もない。学級崩壊や成人式の荒廃は、戦後史の必然的な結果である。以前、文部省が「心の教育」に関する調査を発表した。そこでは、日本の高校生の約80%が、教師や親への反抗を「本人の自由だ」と考えていること、学校のずる休みを同様に考える生徒は65%を超えていること等が明らかにされている。アメリカや中国では、これらの質問項目のうち、最高を示したものでも20%止まりであった。決定的なのは売春（援助交際）に関する質問で、日本の高校生は25%が「本人の自由でしてもいい」と答えている。中国では2.5%、アメリカでは調査されていない。

質問自体が成り立たないのだ。これらは1998年のデータなので、「援助交際」がもはや話題にもならない現在では、日本の数値はさらに上がり、海外との差が拡大していることが予想される。

権威を否定することは、信じるものを失うことでもある。かつて知り合いの女性が、学生時代にアメリカ留学をし、現地の友だちに「あなたは何を信じているのか」と尋ねられたときの話をしてくれた。「何も信じるものなどない」と答えたら、たいそうびっくりされてしまった。彼女にしてみれば驚くのはこちらの方である。しかし仕方がないので「強いて言えば自分かな」と言ったら、ほとんど絶句されたらしい。

突き詰めて考えると、信じているのは自分くらいというのは、おおかたの日本人の偽らざる本心である。しかし、自分で自分を信じるというのは、考えてみれば矛盾であり、空中に体をもたせかけ、寄りかかろうとするに等しい。こういう生き方をしていると、知らず知らずのうちに生きることに對する根源的な不安感が生じてくる。その不安を解消する、もっとも手っ取り早い手段は、欲求を満足させることだ。人間の根本的な欲求には、食欲（物欲、金銭欲を含む）、性欲（生命延長欲、子孫繁栄欲を含む）、他者への優越欲が考えられる。いまの日本人がこれらの充足にどれほど熱心で性急か、具体例を挙げるまでもないだろう。

しかし欲求にはきりが無い。満たしたとたんにもう次のもの、しかもより強烈な刺激や満足欲が欲しくなってしまうのである。まさに「坂道を転げ落ちる」という表現がピッタリ当てはまる状態になる。

こうした中で大きくなった子どもや若者が親になる。そして、日本にしか起こらない児童虐待が日常化している状況がある。

密室育児からの解放

調査によると、虐待をするのは六割が実母で、二割強が実父である。したがって、虐待に関しては、母親の抱える心理的ストレスや育児への不安、欲求不満などがクローズアップされる。

実際に虐待が発覚した際の危機介入については、2000年五月に成立し、同十一月から施行された「児童虐待防止法」を中心にして、さまざまな取り組みが整備されつつある。介入が不十分、あるいは後手に回ったために悲劇を防げなかった例もしばしば報道されるが、関係者による必死の努力が続いていることは確かである。

虐待に至る前の対策としてよく論じられるものに、まず、いわゆる「密室育児」から母親を解放することがある。核家族化、地域社会の解体などが進み、女性が自分の子どもを持つまでに乳幼児に接する機会を持てなくなった。母親になってからも、子育ての先輩からのアドバイスが受けにくい。自然、母親は子どもと一対一で向き合わざるを得ないことが多くなり、その中でストレスを高めていく。

ここから脱却するために考えられていることはいろいろとあり、たとえば母親による、母親のための育児サークルの活発な設立と参加がある。小さな子どもを持つ、若い世代の母親は、多かれ少なかれ先輩や目上の人からの指導助言、アドバイスを受けにくい。社会人になってまで「教える、教えられる」という関係に縛られるのは窮屈だと感じる人は多いだろう。実の親ですら、家庭という自分のテリトリーに入ってくることは我慢できない。近所のおばさんなどもってのほかである。このことは、半世紀以上に及ぶ権威の喪失と否定に通底している。一方、年長者の側としても、親切が仇となっちはいけないので、その点はいきおい慎重になろう。

その点、育児サークルのメンバー同士は原則的に同等・対等である。また、血縁や地縁に基づいたつながりではないので、加入・脱退が自由である。人間関係に縛られる危険性が低い。そもそも、ストレス解消のために存在すべきサークルがストレスの元になってしまうのでは参加者にとって本末転倒だ。サークルに求められるのは、おそらくつかず離れずの関係である。しかし、水を差すようだが、それを逆に短所として見れば「毒にも薬にもならない」ということにもなりかねない。

また他に、公的サービスとして保育システムの整備が求められる。全国的に見て、公立の保育所に子どもを預ける際には、厳しい条件が残っていることが少なくない。入所を希望する段階で就業していなければ許可されず、将来に備えて子どもを預けることは不可能な場合がある。しかし、おそらくこの点は世論に押されて変わっていくだろう。さらに、一定の時間、理由を問わずに子どもを預かるシステムも広がりつつある。親の都合で、子育ての時間や形態を操作できる「育児のコンビニ化」が進む。

民間のベビーホテルや保育所は、これからもどんどん顧客数を伸ばすと考えられる。無認可経営による事故や事件が続発しているが、それはこの業界の盛況に直接水を差すものとはならないだろう。

「三歳児神話」「母性愛神話」の否定

「密室育児」の他、子育てにおいて最近話題になることばに「三歳児神話」と「母性愛神話」があり、多くの母親はこれらの呪縛からも解放されなければならないと言われていく。このふたつを組み合わせて簡単に言えば、「子どもが三歳になる頃まで、母親は育児に専念すべきである」ということになる。定説とまではいかなくとも、いつの間にやらそれが社会的に暗黙の了解となっていて、陰に陽に母親を圧迫している、というところなのだろう。

医学的、心理学的研究の成果からは、三歳までの乳幼児に対して、母親が絶対的な影響を及ぼすかどうかデータ的に明らかになっているわけではない、と言われる。つまり、子どもにとって中心的な養育者は、必ずしも母親である必要はないということである。ここから、父親のさらなる育児への参加が、学術的説得力をもって要請されるようになる。三歳児神話は、まさに単なる迷信、俗信に過ぎないのに、なぜか猛威をふるっている、人々はこの呪縛から自らを解き放ち、性別を問わず、誰もが同等に育児に参加すべきであると主張されるわけである。そして、夫婦、男女の役割は決して固定的なものではなく、もっと自由に選択されるべきだと考えられるようになる。

ほどよい(グッド イナフ)母親

密室育児の打開、「三歳児神話」「母性愛神話」の否定、これらは要するに、「お母さんたち、そんな一生懸命になりなさんな」ということである。子育ては、マニュアルはない、熱心になればなるほど心理的に追いつめられ、ストレスをため、そのあげくに児童虐待では、何のための育児かわかりはしない。そもそもどうして母親だけが育児に追われなくてはならないのか。もっと肩の力を抜いて、楽にいきましょうと勧められるわけだ。

このような意見の理論的な支えとして人気が高いもののひとつに、イギリスの児童精神科医ウィニコット(1896-1971)による「ほどよい母親(good enough mother)」の概念がある。

ウィニコットは小児科外来医として六万例を越す子どもとその家族に接し、その経験に基づいてさまざまな概念や理論の構築に努力した。著述活動にも旺盛に取り組み、無意識や幻想を扱う精神分析学の専門的著作の他に、「日常」を取り扱うソーシャルワーカーや母親への語りかけにも熱心であった。精密な理論化を避け、英国的なセンスを生かして、日常的なことばを多義的なまま使用するために、想像の余地を残す叙述が特徴的であり、

「曖昧」「詩的」と評されることが多かった。「ほどよい」という、いかにも柔らかな表現からも、そのことがよくうかがえる。

「ほどよい母親」をもう少しくわしく言い直すと、「ふつうにみられる献身的な母親」のことだとされている。ウィニコットの言う「ふつう」とは、どういうものか。

これは、臨月期から出生後数週間に渡って続く「母親の原初的没頭」という「正常な病氣」とも言うべき状態に陥ることに始まる。子どもの世話に没頭することがどの程度病的なのかというと、引きこもりとか乖離、もうろう、ある種の分裂性人格などにもたとえられる。新生児を抱えた母親は、誰もがほとんど精神障害者と言われ得るのである。ただし、繊細で豊かな感受性をもって赤ん坊のニーズを感じ取り、それに応えられる状態であると考えられている。

こうした一種病的な状態は、母親が産後の健康を取り戻すに従って、徐々に忘れ去られていく。その中で、赤ん坊の能力が日々発達していくことを母親は感じ取り、次第に母性的なかわりから手を引いていく。そして、母親自身の人生を獲得していくのである。

簡単に言うと、最初は子どもの世話に没頭し、次にその状態から抜け出して自分を取り戻す、という育児のプロセスを踏めるのが「ほどよい母親」である。

ウィニコットはこうも言う。「母親が何かを直感的にやったら、それがもっともよい方法」であり、「母親の心に自然に湧いてくるやりかたで」「自分自身の判断を信じられる時が母親の最良の状態である」。つまり、子育てとは基本的に「何でもあり」であって、助言も手本も指導も有効ではなく、そんなものはそもそもあり得ない、と考えられているのである。

人は人によって人になる

ウィニコットの考え方をこれ以上、直接的にくわしく論じることはしない。ただ、そこに含まれる問題点について、少々考えを述べておきたい。

母親が育児に没頭するのは一種の病気であるとされ、その病気から回復して、再び自分の人生を歩めるようになることが期待されている。つまり、赤ん坊に振り回されて片時も休まることがなく、満足に食事もとれず、趣味は忘れ去られ、外出はできず、友人とも疎遠になる・・・、こうした育児にまつわるもろもろの大変さは、どれも忌まわしい出来事であり、子どもの成長につれて、そこから抜け出さなくてはならない。いつまでもそんなものを引きずっていたら、母親が自分自身の人生を見失うことになり、いつかその重圧に

押しつぶされるか、逆に暴発することになりかねない。そうした事態を避けるために、決してパーフェクトを求めることなく、ほどよく手を抜いていくことが奨励されるわけである。いつまで育児に没頭するか、どの程度まで没頭するかは、母親の直感にまかされる。また、いつごろから、どのくらいの程度で手抜きをしていくかも、母親の判断次第である。

赤ん坊は、母親の育児のやり方に合わせられ、母親が作った鑄型にはめられるように、敷いたレールに乗せられるように育てられる。仮にその鑄型がゆがんでいても、レールが曲がっていても、それは仕方ないことで、直せるものではないし、直す必要もない。どんな母親であっても、彼女が育てるように育つのが、すべての子どもにとってもっとも幸せなことであると考えられている。

母親にとって、育児は重荷か、それとも人生の糧か。それはおそらく両方であり、ウィニコットも同じように考えていただろうと想像する。しかし、「ほどよい母親」では、重荷であるという方が、かなりクローズアップされている。鑄型を作り、レールを敷くのは重労働だから、できるだけ能率よく、最少の手間で最大の効果が得られるようにするのがよい。これが「ほどよい母親」の考え方である。

子どもは、よい人に育てられた時だけ、よい人間として育っていける。当然その反対として、悪い人に育てられれば、悪い人間に育つ。このもっとも極端な例が、いままで世界で何人が発見されてきた「野生児」や「オオカミに育てられた子」である。人間は、オオカミに育てられればオオカミとして育つ。保護された後も、生肉を食べ、四つんばいで歩き、遠吠えをする。ことばを覚えることも不可能に近い。あらゆる生物の中でこんなことが起きるのは、人間に限られている。チンパンジーを家族の一員として育て、人間と同じように遊んでやり、食事のマナーを教え、字を覚え込ませても、結局はチンパンジーとして大きくなることに終わる。人間のまねが多少はできるようになっても、「人間らしさ」を身につけることはない。

ほどよい母親が子どもを育てれば、その子は「ほどよい子」に育つ。もっともそれが、ウィニコットやその考えを支持する人々の望むところなのであろう。その子が親になった時、自分自身がそうされてきたように、当初は異常な病的熱心さをもって育児に没頭し、そのうち徐々に子どもから手を引くようになる。それは結局、自分の思い通りに子どもを操ること、それ以上でも以下でもない。もっと極端に言えば、自分勝手な親が、自分勝手な子どもを再生産することである。ここに、「ほどよい母親」の落とし穴があるのではないだろうか。

子育ては誰のためにするものか、と問えば、十人中八人から九人は「子どものため」と答えるであろう。しかし、その中に「親自身のため」という答えが混じる可能性がある。

「子育ては親育て」「育児は育自」というキャッチフレーズが、最近よく聞こえてくるのだ。こういう人々は「ほどよい母親」を歓迎するであろう。

事実、子育ては、親自身の人格を磨くまたとない機会である。人生のうちで、それ以上のチャンスに恵まれることは、そうそうあるものではないと思う。しかし、それは、親が自分の都合を後回しにして、ひたすら子育てに打ち込んだ、その果てに得られる心境であろう。育児への没頭 そこからの脱却を、親の都合で行うようでは、「親育て」の喜びも、せいぜい子どもが自分の思い通りになったという満足感の増大に終わる。たとえば悪いが、ペットをかわいがると大差はない。

なぜ「ほどよさ」が虐待を生まないか

このように見てくると、「ほどよい母親」の考え方は、日本において児童虐待への抑止効果をもつどころか、逆に助長する危険性を含んでいるものであることになる。「完璧な母親」は存在し得ず、もしいたとしたら偽善か欺瞞であるが、「ほどよい母親」は十分信頼に足る、と考えられている。しかも、「どの程度ほどよければいいのか」といった、客観的な基準はない。すべてが母親の「直感」にゆだねられている。それはつまり母親の「気分」に子育てが左右されることであり、さらに具体的には「好き嫌い」や「損得」にのっかって子どもが育てられることになるのだ。

「ほどよい母親」に代表される育児理論は、日本より欧米の方がはるかに先進的、と言うより、欧米がそもそも発祥の地であって、この分野において日本はそれを輸入している後進国である。それでは、「ほどよい母親」が、日本以上に常識である欧米社会で、なぜ日本並みの児童虐待が発生しないのか。「ほどよい母親」は、基本的に母親のエゴを肥大させる考え方である。それなのに、欧米の母親は日本の母親ほどエゴイスティックではない。

これは多方面からの考察が可能な問題だが、基本的には先に述べたように宗教・信仰の有無がきわめて強く影響していると考えられる。キリスト教について考えると、人間一人ひとは、唯一絶対なる神と、信仰という決して切れない絆で結ばれている。その神が、人間に「汝の隣人を愛せよ」と、友愛を「義」として命じたから、人間は互いに愛し合う存在なのである。なぜ愛し合わなくてはならないか、という問いには「それが神の意志だ

から」、この答え一つしかあり得ない。それ以上の答えを望むのは愚かなことである。

子どもを授かったのも神の意志である。親は、全身全霊をもってその意志の実現に努力しなければならない。これが、欧米の子育ての基本にある考えである。もちろん、人によって信仰心の深浅はあろう。しかし、二千年受け継がれてきたキリスト教の思想は、欧米においてはもはや空気のようなものでもある。いちいち言葉で言わなくても、人々の骨の髄にまで染みこんでいる。

これらは、神の恩寵であるが、それを同時に束縛と感じる人もいよう。そうした中で、「ほどよい母親」の考え方が意味をもつ。キリスト教倫理という、きわめて強力な制約の中で、「少しくらいなら手を抜いてもいいじゃないか」という呼びかけが、人々の肩から力を抜く働きをする。そして、力の抜き過ぎによる怠慢や、育児の放棄は、それこそ二千年の歴史が許さない。親、あるいは大人の自分勝手な振る舞いに対しては、キリスト教社会全体が目を光らせているのだ。あくまでも、神という絶対的な制約を自覚した上での「ほどよさ」である。

社会的な規範や倫理が確立している、という条件の下でだけ、「ほどよい母親」はいちおう育児の方針として成り立つ余地を与えられる。

日本のエゴイズム

現代の日本社会は、宗教という根源的な権威を失って、政治にも、司法にも、労働にも、教育にも、家庭にも権威がなくなった。あらゆることに、個人の基本的人権が優先する。世界の民主主義国家の中で、このことがもっとも徹底しているのは日本である。児童虐待は、この土壌から生まれている。

実質、従うべき外的な規範は、日本には存在していない。憲法に規定された範囲で、その時々 of 社会のニーズに合わせて、規範（法律）は作られる。しかし、ニーズに合わなくなれば作り替えられる。結果、規範はあってもなくても同じになってしまう。別の言い方をすると、規範に従うかどうか、個人の自由な選択にまかされているということだ。

こうした中に、「ほどよい母親」の考えが持ち込まれたらどうなるか。発祥地のイギリスとは、社会風土も人々の考え方も、まるっきり違っている。

ウィニコットは、母親自身が、自分の「ほどよさ」を決めると考えた。育児の過程でぶつかる困難に対して、イライラするのも、怒るのも、落ち込むのも、子どもを憎むのも当然であり、それを無理に抑圧したり否定したりする必要はなく、むしろ積極的に肯定して

よいとした。そのような問題が生じて、それを母親自身が適切に処理して乗り越えていけると、臨床経験から期待できたのである。ちなみに、「ほどよい母親」でいられるためには条件があった。実母であって、一時的に育児に没頭でき、精神的に健康で、夫の支持を得られること、というものである。これらは、結婚後、夫婦間だけで作り上げられるような条件ではない。夫婦それぞれがおかれてきた養育環境が大きく影響するはずで、それはすなわち社会全体に満ちている雰囲気や基盤になっていることに他ならない。「ほどよい母親」は、母親だけ、夫婦だけの問題ではないのである。結局、欧米でこうした社会風土を根底で支えてきたのはキリスト教思想であった。

一方、日本で、母親に「ほどよさ」が期待された場合、母親自身がすべてを決めなければならぬ。どこまで、いつまで没頭していいのか、いつになったら手を抜き始めていいのか、それがすべて母親の直感にゆだねられる。欧米の場合、母親の直感と言えども、そこには有形無形の社会規範、周囲からの要請や期待などが働くであろう。母親はそれを頼り、受け入れた上で、自分の直感を信じていることができる。

かたや日本で「母親の直感」と言えば、まさに母親個人の意識に勝手にわき起こってきた思いを指す。そこに、他者の期待や社会の要請が作用する余地はほとんどない。妄想だろうが邪念だろうが、直感との区別は不可能である。さらにそこへ、ウィニコットが「直感こそ最良である」という太鼓判を押したような形になっているので、他者が介入することはますますタブーになってしまう。

日本人の母親の多くにとって、自分の直感のよりどころになる最大のものは、やはり自分自身の育てられ方だろう。かつて、日本の子育ての基本になっていたのは、土居健郎氏が世界に紹介した「甘えの構造」である。日本では、母は子どもを心理的に絶対受容し、どこまでも甘えさせる存在であった。あえて言えば、そこに「ほどよさ」はなかった。母親は子どものために自分を犠牲にし、どこまでもひたすらに子どもを甘えさせた。一種の滅私奉公である。

したがって、かつての母親は、自身が子どもの頃、無条件にひたっていた甘えの世界を、自分の子育てにも再現する方向に直感が働いたであろうと考えられる。

しかし、戦後民主主義の徹底が、家庭から、母子関係から次第に甘えを駆逐していった。他者を甘えさせるとは、ある程度、自分の権利の侵害を許すことである。そこには、たとえ軽くても、何らかの自我の痛みや傷つきが伴わざるを得ない。しかし、民主主義思想は、個人の権利と自由を保障し、拡大することを第一とする。これは、甘え、甘えさせる関係

を真っ向から否定してかかる考え方である。民主主義社会の風潮の中で、多くの母親が、子どもの甘えを受け入れることができなくなっていった。子どもからの甘えに、耐えきれなくなったのである。

甘えがなくなり、母親の直感は伝統的な基盤を失った。それ以前から、日本社会はあらゆる権威を喪失し、規範の崩壊、秩序の混乱が進んできていた。その結果、多くの人間にとっては、この現実社会にうまく適応することが、生きる目的になる。それは、物質的に豊かになり、快適で便利な生活を実現し、他者に優越することであった。

母親の育児に対する直感が、こうした情勢を基礎にして形成されるのはほぼ当然である。その結果、子育ても、母親自身の豊かさ、快適性・利便性、優越欲求の実現に組み込まれることになる。「子育ては親育て」「育児は育自」というのは、このような母親（もちろん父親も含む）のエゴイズムを積極的に肯定し、それをさらに肥大させるためのスローガンとして機能する。

親のエゴにブレーキをかけ得るのは、外的な規範や強制力だけである。しかし、日本型民主主義・物質的豊かさ至上主義は、そうしたものを失った。その中で育て親になった世代に対して、気持ちや欲求を制御する力は存在せず、いったん彼らが暴走し始めたら、それを止められるものは何もない。刑罰の適用すら、効果がなくなりつつある。

このような日本で、「ほどよさ」を勧めるのは、好き勝手、やりたい放題を親に奨励することにしかない。イギリスでウィニコットのような考え方が生まれたのは、欧米社会でも、キリスト教倫理思想と地域社会の崩壊が徐々に進行してきたことのあらわれと考えることができよう。日本では、事態がさらに悪い方向へ向かっている。

母親の権利意識

甘えの世界に理屈はない。人と人とは、お互いの欲求・情緒・気分をキャッチすると、それをあたかも自分自身のことのように感じて心理的に寄り添うのが、甘えにおいて起きていることである。日本では、古来から人間同士がこのように結びついて来た。これはまた、日本に唯一絶対なる神が存在しなかったことでもある。日本には「八百万の神」がいて、死ねばだれもが「ほとけ」になると考えられてきた。神を介してではなく、人と人との感情の働きによってダイレクトに結びついていた。そして、互いの思いやりによってエゴを抑制しあってきた。創造主たる神によって、人間と社会が束ねられてきた欧米とは、ここが決定的に違う。欧米的個人主義は、神の存在によって、エゴイズムやソーシャル・

ダーウィニズムへの墮落が防止されてきた。

何千年にも及ぶこうした精神風土の違いを無視して、戦後、日本に民主主義と個人主義が急激に輸入された。旧来のあらゆる文化・思想は否定され、老若男女を問わずすべての国民が個人として自立することが求められた。たとえ親子であっても、同等・対等に基本的人権を備えた、独立した人格同士である。すると、社会は権利を中心にして運営されるようになる。「公共の福祉に反する」ときにだけその権利は制限されるが、「公共の福祉」は社会情勢によって流動するので、人々の権利は常に拡大する傾向をもつ。その反動として、義務は限りなく縮退していく。

母子関係においても、両者は基本的に同等・対等である。そうになると、母親が子どもに尽くさなければならない義務は、さして見当たらない。養育の義務以上に、腹を痛めた我が子なので、当然自分がかわいがり、育てたいように育て、育児を楽しみ、子どもを自分の所有物とする権利が、母親にはあるのだ。子どもにも当然、母親を自分に従わせ、養育が不適切ならばそこから逃れる権利はあるのだが、乳幼児が自分でその権利を行使することはできない。こうなると、母親の権利意識の肥大にブレーキをかけるのは、かなり難しい。

親子の逆転

親の意識の根底には、多かれ少なかれ「子どもは親（大人）の思い通りになって当然」という本音がある。そこでは「どのように育つことが、この子にとって本当に幸せか」ということは、ほとんど問題にならない。多くの親が反対に「この子を持ったことで、どれだけ自分が幸せになれるか」と考える。それは、程度の差はあれ、子どもをペットにし、なくさみものにし、癒しグッズにする発想である。自分にそんな気持ちは微塵もないと断言できる親が、果たしてどれだけいるだろうか。虐待のニュースが流れるたびに多くの母親が「気持ちがわかる」「私もいつするかわからない」と述べること、識者や専門家も「虐待はどこの家庭でも起こり得る」とコメントすること等から、親の本音が想像されてしまうのである。

虐待につながると思われる家庭の状況が調査されたところ、他をかなり離して上位を占めたのは「経済的困難」「親族、近隣、友人から孤立」「夫婦間不和」の三項目であった。いずれも、虐待される子ども本人にはまったく関係も責任もない事柄である。次いで「育児に嫌悪感、拒否感情」と「育児疲れ」がほぼ同数で並んでいる。自分の子育てに悩み、

不安を抱き、その結果ストレスを高めているケースは、虐待をする親の中ではむしろ少数派である。虐待の芽は、子育てそのもの以外の部分に生じていることが多いのである。

家庭が経済的に困難（とは言っても、三度の食事にも困るような家庭がそれほど多いとは、現在の日本では考えにくいのも事実だ）で、近所や友人から孤立し、夫婦仲もうまくいかなければ、ほとんど必然的に親の心はすさんでいき、支えや慰め、励まし、あるいは欲求不満のはけ口を必死に求めるだろう。矛先はどうしても目の前の子どもに向かわざるを得ない。しかし、子どもに親の心を満たすことは無理である。他ならぬ子ども自身こそ、親の深い愛情のもとでのみ、人間らしい健全な成長を遂げることが可能になるというのに、それと正反対の状況が出現してしまう。虐待的な家庭の多くで、このように親子の立場が逆転し、それが破綻していることが想像される。

さらに、こうした親子の逆転現象は、おそらく家庭の経済的・知的レベルと関係なく、日本中に相当広く蔓延している。先ほど、日本の母親が子どもの甘えに耐えられなくなったと述べた。いまはその反対に、親が子どもに甘える。現代版「甘えの構造」は、他者からの甘えは許せないのに、他者に対してはどこまでも甘えさせてもらうことを望む、という形になったのだ。

「虐待はどここの家庭でも起こり得る」というのは、親が親としての立場を維持できていないことでもある。これは、誰もが同等・対等に権利を有しているという民主主義的思想が、極度に焦点化した結果である。

果たして対策はあるのか

いま、日本の多くの母親たち、そしてもちろん父親たちにも、本当に望まれているのは親としての「ほどよさ」ではない。むしろ我が身を、犠牲とは言わない、せめて後回しにしてでも子どものために尽くすという、真に献身的な子育ての姿勢である。しかし、いまは逆に「献身的な親ほど、かえって虐待に走る危険性を秘めている」と考えられるのが一般的である。「子どもと距離をとり、育児にほどよく手抜きができれば、虐待は起きにくい」と言われている。それはつまり、子どもに対して無関心になれという勧めである。実際、子どもに無関心な親が増えている。そして同時に、虐待も急増している。

また、母親が子どもに愛情を持ってなくても、それはむしろ当然で、ごく自然なことである、そこから出発して、虐待に向き合わなくてはならないという意見が圧倒多数である。たしかに、現に虐待をしている親に説教をしたり、「親としてのあるべき姿」「とるべき

養育態度」等を指導しても、効果はなく、むしろマイナスに作用するだろう。ありのままの親を受け入れ、認めるところから始まることもやむを得ない。

しかし、そのことと、親はダメでいい、喜怒哀楽のままに振る舞ってもいい、まともなことはできなくていいというような条件を最初から提示することとは、まったく話が別である。

子どもにとって、親は唯一絶対である。出産医療が急速に進歩し、それにまつわる法制度も論議が続いて、親は血を分けた我が子を「授かりもの」として甘受するだけでなく、主体的な意志や意図によって選択できる自由をもつようになってきた。しかし、子どもには、生まれを選択する自由は最後まで与えられない。ということは、巡りめぐって、親にも血縁を選択する自由は結局のところありはしないということである。

いずれにせよ、子どもに親は選べない。親としての努力を最初から放棄するような姿勢は、少なくとも子ども自身に対しては許されないはずである。しかし、こうした意見も、権利が肥大して、責任や義務が極端に小さくなってしまった日本社会には、ほとんど説得力を持たないだろう。

先ほどの繰り返しになるが、現に悩んでいたり、罪を犯してしまったりした母親を責めてみても始まらない。また、そうした母親たちを直接支援しても、虐待の根本的な解決にはほど遠い。誤解されると困るので付け加えるが、支援活動は無用だと言いたいのではない。対症療法も必要である。同時に、根本的な解決策を探らなければならないということである。

つまるところ、将来親になった時に、虐待を起こさないような子どもたちを育て、教育していく以外に道はないであろう。仮にいま、その取り組みが始まったとしても、効果が現れるのは、おそらく五十年、百年といった単位の、未来のことである。

それまで、虐待が増え続けていく可能性は高い。われわれは、その状況に耐えながら生きていかなければならないのだ。

参考及び引用図書

信田さよ子編 子どもの虐待防止最前線． 大月書店，2001

氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕編 心理臨床大辞典． 培風館，1992

不許転載